

国際協力を考える ～基金の向こう側へ～

平成20年度 教師海外研修

研修国：タンザニア

福井市森田中学校 森川 禎彦

問題の所在

反省

- 「日本に生まれてよかった」
- 「かわいそうだから募金しなくちゃ」

経験

- 現地の人々との出会い
- タンザニアの人々と向き合い共に悩み、話をしながら活動を行う青年海外協力隊

伝えたい

- 援助の前に考えなければならないことがある。
- 援助される側のことを考えてみる。

募金の向こう側へ

実践の目的

タンザニアを通して他国の文化・歴史・人・教育・風土・社会問題など、異文化を理解しようとする態度を養う。

国際協力を行ううえで注意すべきこと、してはいけないこと、大切にすべきことを考える。

タンザニアで活躍する青年海外協力隊員の活動やJICAの協力事業を通して、国際協力のあり方について考える。

第1時 タンザニアはどんなところ？

▣ 生徒の考える「アフリカ」のイメージ

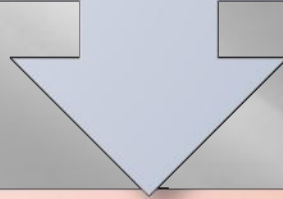
暑い・貧困・黒人・水が汚い・
キリン・食料不足・内戦・奴隷
裸足・ライオン・サハラ砂漠・
ピラミッド・電気が無い・
たくさんの民族・病院や学校無い
怖い・大自然・難民・動物が多い

第1時 タンザニアはどんなところ？



第1時 タンザニアはどんなところ？

暑い・貧困・黒人・水が汚い・キリン・食料不足・内戦・
奴隷・裸足・ライオン・サハラ砂漠・ピラミッド・電気が
無い・たくさんの民族・病院や学校無い・怖い・大自然・
難民・動物が多い



タンザニアは〇〇な国

進化中・貧しい・明るい人が多い・貧しいけど心が豊か・今を精いっぱい生きている・元気・意外とモノがある・笑顔になる・頑張っている・生き生きしている・思っていたより楽しそう

第2時 タンザニアの抱える問題



第2時 タンザニアの抱える問題

日本		タンザニア
1,3人	出生率	4,8人
82歳	平均寿命	46歳
4人	5歳未満死亡率	122人
0,1%以下	HIV感染率	6,5%
100%	15歳未満就学率	73%
100%	成人の識字率	69%
データなし	所得が1日1ドル以下の割合	58%

第2時 タンザニアの抱える問題

日本はどのような国際協力をするべきか

平均寿命が短い

・医療技術を教える

15歳未満の就学率低い

・募金して学校を建てる ・先生を派遣する

HIV感染率が高い

・薬を送る ・医者を派遣する

5歳未満死亡率高い

・食べ物を送る ・薬を送る

清潔な水が得られない

・きれいな水を送る

未舗装の道路が多い

・資金の援助

第2時 タンザニアの抱える問題

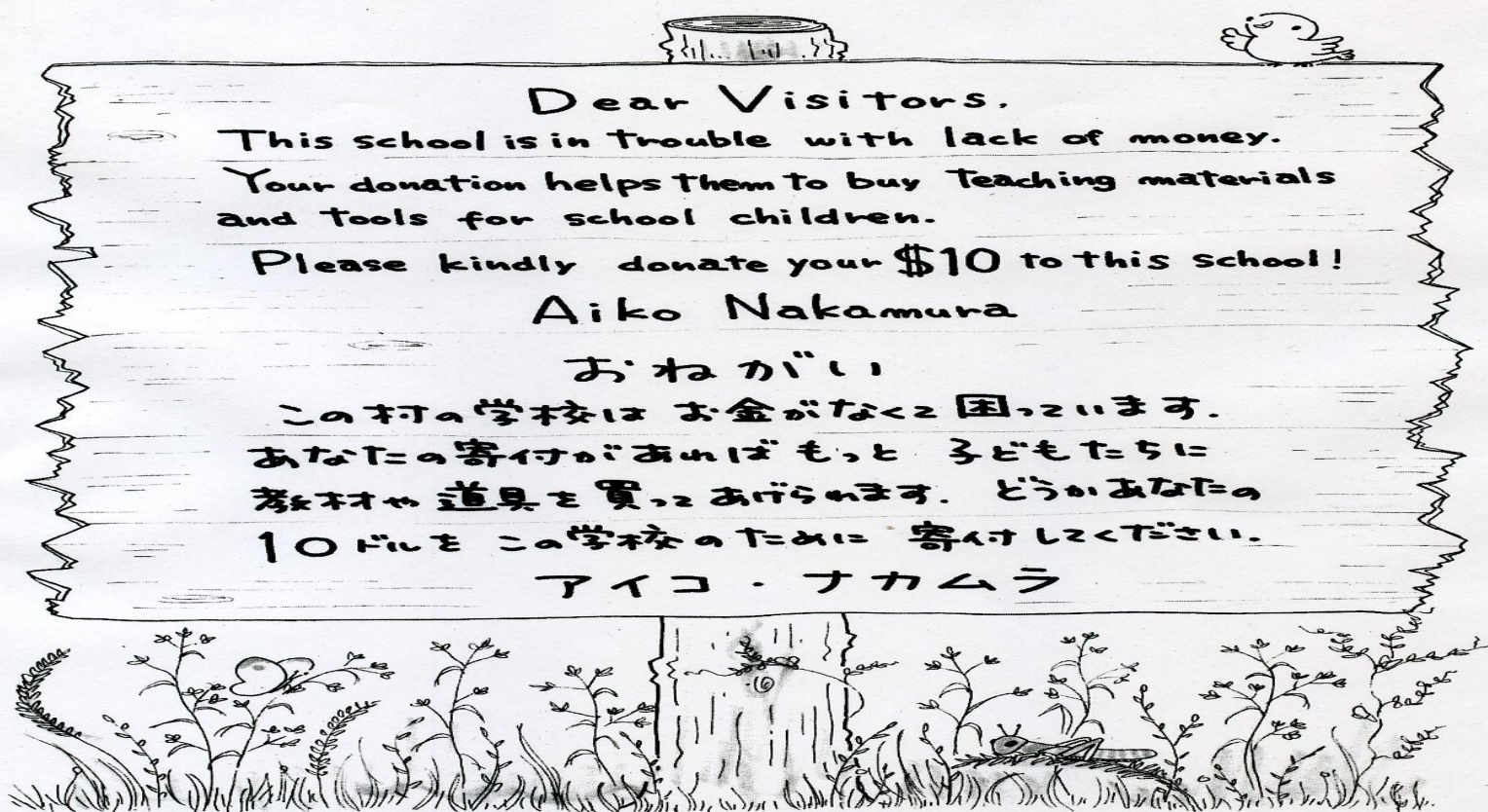
生徒の感想

- 前の授業ではタンザニアに対して良いイメージを持ちました。でも問題が山積みなことも分かりました。昔の日本もこんな感じだったはずだと思うから、**他の国と一緒に協力してタンザニアを発展させられたらいいな**と思いました。
- 私たちは、タンザニアや他の**苦しんでいる国のため**に**できることをしなければならない**と思いました。
- タンザニアはやはり世界的な協力がないとダメなくらい貧しい国で、そのためにも**私もできる限り募金したい**と思いました。

お金やモノを援助するだけでいいの？

第3時 援助することの意味

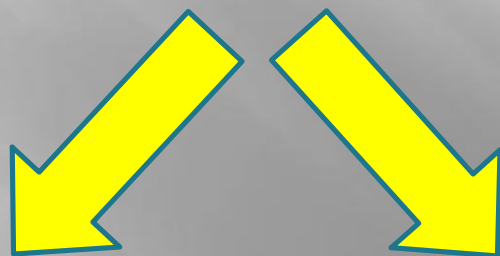
図 1-3 1枚の看板



第3時 援助することの意味

アイ子

- かつてこの村に訪れた日本人の学生
- 帰国後にバザーなどで20万円集め、バーン村の学校に寄付
- 今後も寄付者が現れるようにと看板を立てた



賛成

反対

第3時 援助することの意味

反対

- たまたま訪れた村に寄付するのは、単純すぎる。
- 寄付を期待してしまっ、村の人たちが自分たちでなんとかしようという気持ちをなくさせる。
- 村の人たちは本当にアイ子の行動を喜んでいるのかどうかかわからない。

賛成

- アイ子は、まだ若いのに20万円も集めるなんてすごく立派だと思う。
- お金を寄付するだけでなく、看板を立てて、その後も寄付を集まるように考えたのが良い。
- 実際に行動に移しているところが偉い。

村の人がどのような考えを持っているのか

何を必要としているのか

などの情報を集める必要性

第4時 援助を「する側」と「される側」

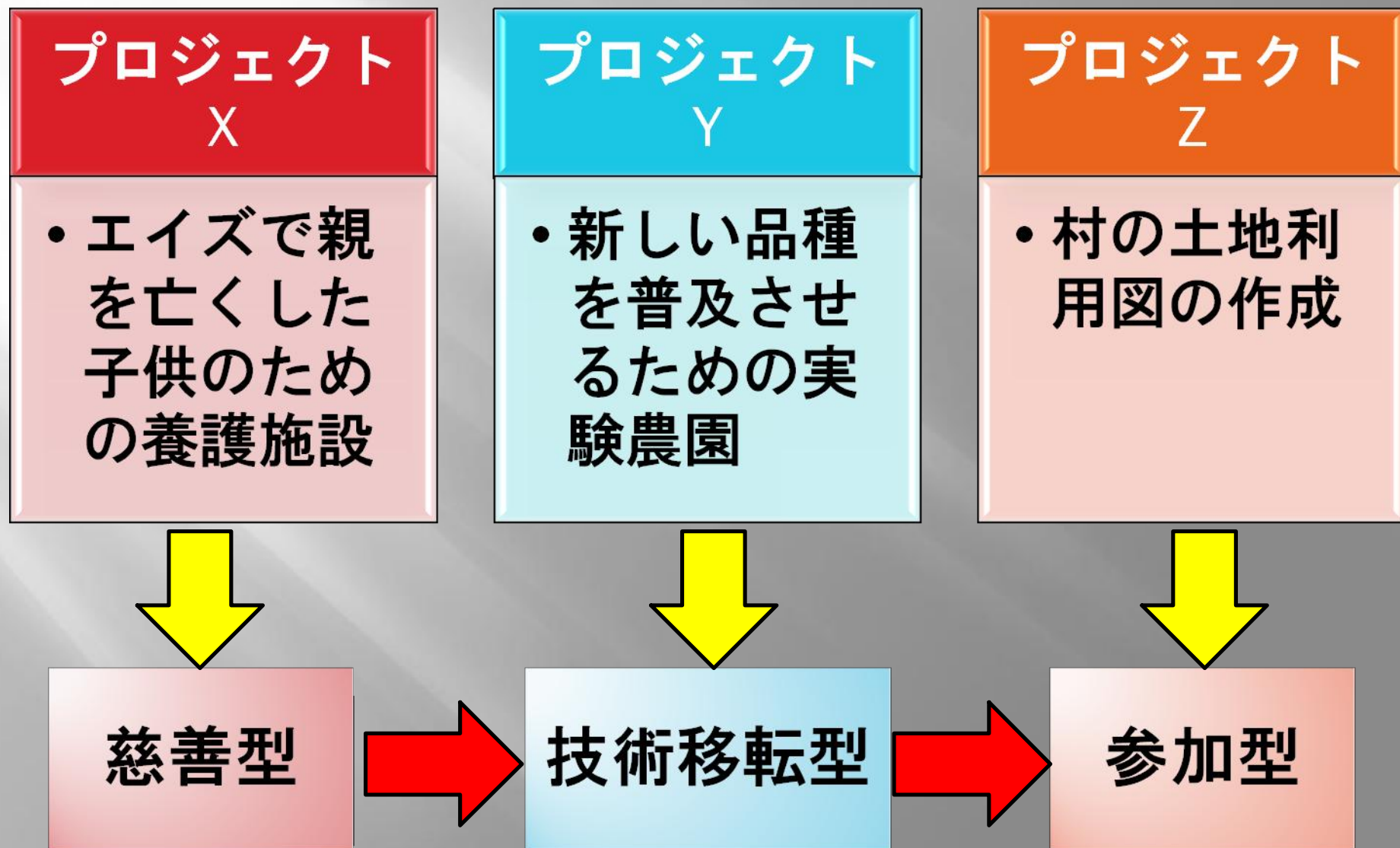
ロールプレイ「再びバーン村へ」

- ・アイ子・訪問者・タイ人ガイド・村長・村人

村で調査する際の困難な点

- ・アイ子たち外国人が3日間という短期間で村の意見をすべて把握するのは難しい。
- ・たった3日間で、援助してくれるかもしれない人に本音なんて話してくれない。
- ・村の代表者の意見が村全体の意見とは限らない。

第5時 援助の前に考えること



第5時 援助の前に考えること

国際協力を行ううえで、注意すべきこと、
してはいけないこと、大切にすべきこと

- 「援助される側」の立場を考え行動する。
- 相手がどんな援助を求めているかをしっかり聞く。
- むやみやたらに寄付やモノを送ったりするのは良くない。
- 一回のみで長続きしないことはしない。
- 「援助される側」の自立も考えた協力をしてなければならない。

第6時 募金の向こう側へ

国際協力を行ううえで、大切にしなければならないこと

必要性

- ・ 本当に「援助される」側にとって必要かどうか

継続性

- ・ 支援が一回だけで終わらず続けていけるかどうか

自立

- ・ 「援助される」側の自立を阻害するものにならないか

第6時 募金の向こう側へ

日本はどのような国際協力をするべきか

平均寿命が短い

・医療技術を教える

技術移転型

15歳未満の就学率
低い

・募金して学校を建てる

慈善型

HIV感染率が高い

・薬を送る ・医者を派遣する

慈善型

5歳未満死亡率高い

・食べ物を送る ・薬を送る

慈善型

清潔な水が得られ
ない

・きれいな水を送る

慈善型

未舗装の道路が多い

・資金の援助

慈善型

第6時 募金の向こう側へ

「必要性」「自立」「継続性」を大切にしたものになるために

HIV感染の予防法を教える

- ・感染が広がる原因・感染者の多い場所がどこか・予防法を知っている医者数、など

井戸の掘り方を教え、一緒に作る

- ・人口の多い所、どこに一番必要か、井戸を掘る材料、水質の良し悪し、など

教師を派遣し、タンザニアの教師を育てる

- ・教師の数、教材の不足状況、タンザニアが自立して教えるための教師の指導法、など

タンザニアにあった道路を一緒に作る

- ・本当にその道路が必要なのか、作った道路を継続して使っていけるのか、など

第6時 募金の向こう側へ

生徒の感想

- JICAのプロジェクトが僕の考えていた事と全く同じだったので驚いた。
- 相手の立場に立とうとすることが大事なことなんだなと気づきました。**自己満足じゃなくて本当に相手にとって良いことなのかを考えることは、国際協力だけでなく普段の生活にも役立つな**と思いました。
- 実際にJICAの松井さんに来ていただいて、また一つ学ぶことができました。**「技術移転型」で相手に教えることから「参加型」につなげていくって何だかいいな**と思いました。
- 国際協力というと募金すれば相手の人は喜んでくれると思っていたけど、そうじゃなくて、**相手の人がどう思っているかなどそういう気持ちも大切なんだ**ということがわかりました。
- 第2時の時には、特に何も考えずにお金やモノを送ることが国際協力だと思っていました。でも今日改めて考えると、その前に**集めなきゃいけない情報や考えなきゃいけないことがあるんだな**と思いました。

第7時 「人」を通した国際協力



「タンザニア
にはタンザニア
のやり方がある」

「意見を尊重
して一緒に答
えをさがす」



「タンザニア
の人と同じ目
線で、を心が
けて活動して
います」

「タンザニア
は日本と比べ
ると死が身近
な国」



「『幸せって
何だろう？』
モノがなくて
も幸せそう」

「みんな一人
ひとりが世界
の幸せについ
て考えること
が大切」



「子どもや先
生達の笑顔が
やりがい」

「言葉の違い
でうまく伝え
られないこと
もある」

第7時 「人」を通した国際協力

生徒の感想

- いろんな問題を解決するためには一つの国の中だけでなく、たくさんの国の協力が必要なんだと思いました。人と人は国境を越えてつながっていけると思いました。
- 「国際協力って何？」って自分でいろいろ想像していたけど、授業を通して「国際協力＝人と人とのつながり」であることがわかりました。募金は今まで何度もしてきたけれど、私達は何に使われているかも知らないまま募金していることを思い知らされました。援助の意味を理解してから募金をするべきだと思いました。
- 最初は、タンザニアを助けるためには、お金やモノをあげればいいと思っていました。でも、お金やモノをあげてもどうせすぐに無くなってしまいうし、長い目で見たらあまりタンザニアに対して役に立たないことがわかりました。この授業を通して、広い視野を持つことの大切さを学びました。
- 宇野隊員の「タンザニアにはタンザニアのやり方がある。タンザニアの人の意見も尊重する」という言葉が印象に残りました。これはまさしく今私たちが勉強したこと。青年海外協力隊の人も「継続性」や「自立」や「必要性」を大切にしているのだと思いました。

1. タイトル： 国際協力を考える～募金の向こう側へ～

2. 氏名： 森川 禎彦

3. 学校名（担当教科）： 福井市 森田中学校

4. 実践教科（時間数）： 社会科（7時間）

5. 対象生徒・学年（人数）： 2年生 34名

6. カリキュラム

(1) 実践の目的

- ① タンザニアを通して他国の文化・歴史・人・教育・風土・社会問題など、異文化を理解しようとする態度を養う。
- ② 国際協力を行ううえで注意すべきこと、してはいけないこと、大切にすべきことを考える。
- ③ タンザニアで活躍する青年海外協力隊員の活動や JICA の協力事業を通して、国際協力のあり方について考える。

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
第1時（社会科） テーマ：タンザニアはどんなところ？ ねらい：タンザニアの位置・気候・文化などについて知る。	①アフリカに対して抱いているイメージを話し合う。 ②写真・実物・映像資料からタンザニアについて知る。 ③タンザニアはどんな国であるかを考え、話し合う。	・タンザニアで収集した写真、映像、通貨、ティンガティンガ、キャッサバチップス、マコンデ、カンガなど ・ワークシート
第2時（社会科） テーマ：タンザニアの抱える問題 ねらい：写真からタンザニアと日本の相違点や共通点を探し出し発表する。統計資料を使用し、タンザニアの現状を知るとともに、日本の国際協力について考える。	①グループ内で写真から読み取れることや疑問点を付箋に記入する。 ②統計資料からタンザニアと日本を比較する。 ③タンザニアでは何が問題で、それを解決するために、日本はどのような国際協力を行うべきかを考える。	・写真資料（教室、道路、小学生、トイレ） ・統計資料（平均寿命、HIV、就学率、5歳未満死亡率など） ・ワークシート
第3時（総合的な学習の時間） テーマ：援助することの意味 ねらい：モノやお金を援助することの意味を考える。援助が現地に与える影響を考え、「援助される側」の人々の意見を聞く必要性に気づかせ	①ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「一枚の看板」を行う。 (1)自分ならばバーン村の小学校に何ドル寄付するかを考えさせる。 (2)かつて村に20万円寄付し、看板を立てたアイ子の行動に賛成か、	・ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「一枚の看板」 ・ワークシート

る。	反対か。その理由とともに考える。 (3) アイ子の行動がよりよいものになるためには、どのようにしたらよいかを考える。	
第4時（総合的な学習の時間） テーマ：援助を「する側」と「される側」 ねらい：ロールプレイを通して援助を「する側」と「される側」の認識の違いに気づく。現地で情報を収集することの大切さや難しさを知る。	①ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「再びバーン村へ」を行う。 (1) バーン村でどのような情報を集めたらよいかをグループで考える。 (2) アイ子、訪問者、タイ人ガイド、村長、村人などの役割カードを配布し、アイ子や訪問者と村の中心人物とのミーティングという場面設定でロールプレイを行う。 (3) 村で調査する際の困難な点について考え、話し合う。	・ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「再びバーン村へ」 ・ワークシート
第5時（社会科） テーマ：援助の前に考えること ねらい：国際協力の現場で行われている開発プロジェクトの種類や方法を知る。国際協力を行ううえで、注意すべきこと、してはいけないこと、大切にすべきことを考える。	①ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「プロジェクトを選ぼう」を行う。 (1) 「エイズで親を亡くした子供のための養護施設」「新しい品種を普及させるための実験農園」「村の土地利用図の作成」の3つの開発プロジェクトのうちどれに支援すべきかの優先順位をつけ、その理由を考える。 (2) 各開発プロジェクトのメリット・デメリットについて話し合う。 ②開発プロジェクトには「慈善型」「技術移転型」「参加型」があり、3つの開発プロジェクトがどれに相当するかを考える。 ③国際協力を行ううえで、注意すべきこと、してはいけないこと、大切にすべきことを考え、話し合う。	・ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「プロジェクトを選ぼう」 ・ワークシート

第6時（総合的な学習の時間） テーマ：募金の向こう側へ ねらい：国際協力が「必要性」「自立」「継続性」を大切にしたものになるためにはどのような支援を行うべきかを考える。	①前時の授業を振り返り、国際協力を行ううえで、大切にしなければならないことを話し合う。 ②第2時で出した支援の方法が「慈善型」「技術移転型」「参加型」のどれにあたるかを考える。 ③自分たちが考えた国際協力が「必要性」「自立」「継続性」を大切にしたものになるために再度、支援の方法を考える。 ④実際に JICA がタンザニアで行っている協力事業を知る。	・ JICA のタンザニアへの協力事業の資料 ・ ワークシート
第7時（総合的な学習の時間） テーマ：「人」を通した国際協力 ねらい：国際協力とは、一方的にモノや資金を援助することではなく、現地の人と共に悩み考える「人」と「人」のつながりであることを考える。	①タンザニアで活躍する青年海外協力隊員の活動を紹介する。 ②隊員からのビデオレターを視聴する。 ③これまでの学習を通して、国際協力とは何かについて考える。	・ 隊員の写真 ・ 隊員からのビデオレター

(3) 本時の学習

テーマ 募金の向こう側へ

1. ねらい：国際協力がモノやお金を援助することだけに終わらず、「必要性」「自立」「継続性」を大切にしたものになるためにはどのような支援を行うべきかを考える。
2. 対象：2年生 34 名（男子 17 名、女子 17 名）
3. 時間：50 分
4. 展開：（総時数 7 時間扱いの本時は 6 時間目）

	学習活動	資料・準備物
導入	①前時の授業を振り返り、国際協力を行ううえで、大切にしなければならないことを話し合う。 ・本当に「援助される」側にとって必要かどうか。(必要性) ・支援が一回だけで終わらず続けていけるかどうか。(継続性) ・「援助される」側の自立を阻害するものにならないか。(自立)	・これまでの授業で使用した資料・ワークシート
展開	②第2時で出した支援の方法が「慈善型」「技術移転型」「参加型」のどれにあたるかを考える。 《問題》 《支援方法》 《支援の型》 平均寿命が短い・・・医療技術を教える・・・「技術移転型」 15歳未満の就学率低い・・・募金して学校を建てる・・・「慈善型」 ・先生を派遣する・・・「技術移転型」 H I V感染率が高い・・・薬を送る・・・「慈善型」 ・・・・医者を派遣する・・・「技術移転型」 清潔な水が得られない・・・きれいな水を送る・・・「慈善型」 未舗装の道路が多い・・・資金の援助・・・「慈善型」 5歳未満の死亡率高い・・・食べ物を送る・・・「慈善型」 ③自分たちが考えた国際協力が「必要性」「自立」「継続性」を大切にしたいものになるために再度、支援の方法を考える。その際、どのような情報が必要かも考える。 (例) H I V感染率が高い・・・「H I V感染の予防方法を教える」 必要な情報・・・感染が広がる原因、特に感染者の多い場所、予防法を知っている医者数、など 清潔な水が得られない・・・「井戸の掘り方を教え、一緒に作る」 必要な情報・・・人口の多い所、どこに一番必要か、井戸を掘る材料、水質の良し悪し、など	・ワークシート
まとめ	④実際に JICA がタンザニアで行っている協力事業を知る。 (例) 農業セクター・・・灌漑農業技術普及支援体制強化計画 インフラ(水)セクター・・・都市地域水供給計画 インフラ(道路)セクター・・・道路メンテナンス管理能力支援計画 保健セクター・・・HIV 感染予防のための組織強化プロジェクト	・JICA のタンザニアへの協力事業の資料

授業の実際

【第1時】タンザニアはどんなところ？

最初にアフリカに対して抱いているイメージを話し合った。タンザニアという国自体は生徒にとっ

て全くといってよいほど馴染みの無い国である。実際、タンザニアについて何らかの知識を持っている生徒は一人もいなかった。したがって、タンザニアについてのイメージを聞くことは困難であると感じたため「アフリカ」のイメージを聞くことにした。

・生徒の「アフリカ」に対するイメージ

暑い・貧困・黒人・水が汚い・キリン・食料不足・内戦・奴隷・裸足・ライオン・サハラ砂漠・ピラミッド・電気が無い・たくさんの民族・病院や学校無い・怖い・大自然・難民・動物が多い

このように、「貧困」「奴隷」「電気が無い」「病院や学校が無い」など、言うなれば「負」のイメージが多く挙げられた。これは、生徒達の生活経験からのイメージであり、テレビなどのメディアからの影響が大きいと考えられる。このような「負」のイメージの多いアフリカの国の一つであるタンザニアも生徒にとってその例外ではない。

次に、写真資料や実物資料（通貨、ティンガティンガ、キャッサバチップス、マコンデ、カンガなど）・映像資料（小学校の様子、民族の踊りなど）を実際に体験したエピソードを交えながら提示した。初めて目にする写真・映像・実物に驚きや感動が多かったようである。特に、キャッサバチップスなど日本にない食べ物などは好評であった。

最後に「タンザニアは〇〇な国」というフレーズの〇〇に当てはまる言葉を考えさせた。

・生徒の「タンザニアは〇〇な国」

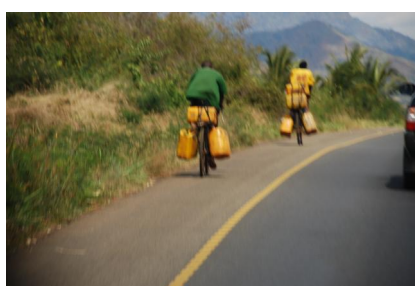
進化中・貧しい・明るい人が多い・貧しいけど心が豊か・今を精いっぱい生きている・元気・意外とモノがある・笑顔になる・頑張っている・生き生きしている・思っていたより楽しそう

このように、当初のアフリカに対する「負」のイメージから一変して、多くの生徒が「明るい」「元気」「楽しそう」などと回答した。これは、私自身がタンザニアでの経験を「楽しかった」と感じ、その楽しさを無意識のうちに伝えていたからなのかもしれないが、初めて目にする異文化を生徒達は肯定的に受け取るとともに最初のイメージとのギャップを楽しんでいるように思えた。

[授業後の生徒の感想]

- ・タンザニアは思っていたよりも、とてもよい国だと思いました。物の豊かさはないけれど、そのぶん心の豊かさがあるのかなと思いました。みんな目が輝いていて生き生きとしている感じがしました。
- ・最初は、タンザニアに対して良いイメージはなかったけれど、今日、写真とかビデオを見てタンザニアの人たちの楽しんでいる姿がとても印象に残りました。貧しそうというイメージを忘れてしまうくらい、とても良い国だなと思いました。

[第1時で使用した写真資料(一部)]





【第2時】タンザニアの抱える問題

前時の授業でタンザニアに対して多くの肯定的なイメージを持った生徒達に、次は写真からタンザニアと日本の相違点に着目させて考えさせた。写真は各グループに4枚（教室・道路・小学生・トイレ）準備して、気づいたこと探し出し発表させた。その際、写真を見て気づいたことを付箋に書き出させた。



「小学校の教室」



「道路」



「小学生」



「トイレ」

「教室」の写真に関しては、「たくさんの生徒がいて狭そう」「電気や窓ガラスがない」など。「道路」の写真には、「大きな水たまりがある」「アスファルトじゃない」「家が土でできている」など。「小学生」の写真には、「足が泥だらけ」「女の子でも髪の毛が短い」「ポリタンクを楽器にしている」など。「トイレ」の写真には、「汚い」「トイレットペーパーが無い」「水洗式ではない」などの意見が出された。生徒は、身近な学校や道路というものを日本のそれとの相違点を考え、タンザニアの物質的な貧しさを感じたようであった。



気づいたことを付箋に書く



写真を見て気づいたこと

次に、統計資料を使用しタンザニアと日本を比較することにした。その際、数値だけを示したワークシートを準備し、それが何を示す統計資料かを生徒に予想させた。例えば日本 82 歳、タンザニアは 46 歳…「平均寿命」などである。その他「出生率」「5 歳未満死亡率」「HIV 感染率」「15 歳未満の進学率」「成人の識字率」「所得が 1 日 1 ドル以下の人口の割合」など、日本と比較させながらタンザニアの抱える問題について考えさせた。

次に、タンザニアでは何が問題で、それを解決するために日本はどのような国際協力を行うべきかを考えさせた。前時の授業では、タンザニアに対し多くの肯定的なイメージを持っていた生徒達は、写真や統計資料からタンザニアだけでは解決できない深刻な問題もあると気づき、その支援の方法を真剣に考えていた。しかし、その支援の方法の多くは「学校や道路を作る資金の援助」「食べ物を送る」「薬を送る」「水を送る」「募金をする」などお金やモノを援助するというものであった。

そこで、「みんなが真剣にタンザニアの抱える問題について考えてくれたのはすごく嬉しい。でも、お金やモノを援助することだけで本当に良いのかな？」という投げかけをして次時からの課題とした。

[授業後の生徒の感想]

- ・ 前の授業ではタンザニアに対して良いイメージを持ちました。でも平均寿命が短い、成人の識字率が低いなど、問題が山積みなことも分かりました。昔の日本もこんな感じだったはずだと思うから、他の国と一緒に協力してタンザニアを発展させられたらいいなと思いました。
- ・ エイズで苦しんでいる人、5歳にもなれずに亡くなる人、日本では考えられないことがタンザニアでは普通に起こっているのだなと思いました。だから私たちは、タンザニアや他の苦しんでいる国のためにできることをしなければならないと思いました。
- ・ タンザニアはやはり世界的な協力がないとダメなくらい貧しい国で、そのためにも私もでき

【第3時】援助することの意味

生徒に何らかの募金を今までにしたことがあるかを問うと、募金したことのない生徒は一人もいなかった。しかし、その募金がどのようなルートで、何に使われているかを知っている生徒はほとんどいなかった。そこに問題があると考えた。そこで前時の最後に生徒に投げかけた課題を考えるために、ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「一枚の看板」を活用した。このワークはモノやお金を寄付することの意味、すなわち「援助」することの意味を考えることをねらいとしている。

内容は、タイのチェンマイでトレッキングに参加した一行がたまたま訪れた山岳少数民族の村で、子どもの教具を購入するために10ドル寄付してほしいという看板を見つける、という場面から始まる。その看板を立てたのは日本人である「アイ子」という人物であるという。「アイ子」はかつてこの村にトレッキングで訪れた日本人の学生で、バーン村のために自分にできることはないかと考えて、帰国後大学のバザーなどで集めた20万円をこの村の学校に寄付していた。そして、今後も寄付者が現れるようにと、このような看板を学校の横に立てていったのだ、という。

このような、アイ子の行動に賛成か、反対か。その理由とともに生徒に考えさせた。すると賛否両論様々な意見が出された。

[賛成意見]

- アイ子は、まだ若いのに20万円も集めるなんてすごく立派だと思う。
- お金を寄付するだけでなく、看板を立てて、その後も寄付を集まるように考えたのが良い。
- アイ子があんまりなくちゃという気持ちだけでなく、実際に行動に移しているところが偉い。
- 学校など教育にお金を使うのは村の将来のためになるから良い。

〔反対意見〕

- たまたま訪れた村に寄付するのは、単純すぎる。
- 他にも貧しい村があるのに、この村だけに寄付しても意味がない。他の村から妬まれる。
- 寄付を期待してしまって、村の人たちが自分たちでなんとかしようという気持ちをなくさせる。
- 村の人たちは本当にアイ子の行動を喜んでいるのかどうかかわからない。

全体としては、やや賛成意見の方が多かった。タイの山村で20万円という金額は、村の年間予算に匹敵する額で、日本での価値にすれば100万円にも200万円にも相当するという。寄付がたとえ善意であっても様々な影響が出てくるであろう。

次に、アイ子の行動がよりよいものになるためには、どのようにしたらよいかを考えさせた。

- 村の人たちがアイ子の行動をどう思っているのかについて確かめる。
- 村が必要としているものは何かを調べる。
- 寄付金がどういうふうに使われたかを調べる。

などの意見が出された。このワークを通じて、「寄付をする」という明快で簡単そうな活動も、継続的で有効なものになるためには様々な影響を考える必要があることや、村の人がどのような考えを持っているのか、何を必要としているのか、などの情報を集める必要性を感じることができたようである。

【第4時】援助を「する側」と「される側」

前時に引き続き、ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「再びバーン村へ」を行った。まずバーン村でどのような情報を集めたらよいかを各グループで考えた。生徒からは、前時で疑問となっていた村の人がどのような考えを持っているのか、何を必要としているのか、などの意見が出された。

次に、アイ子が訪問者2人とともに再びバーン村に訪れたと仮定して、アイ子、訪問者、タイ人ガイド、村長、村人などの役割カードを配布し、アイ子や訪問者と村の中心人物とのミーティングという場面設定でロールプレイを行った。慣れないロールプレイに最初は戸惑っていたものの、それぞれの役割を担った生徒は自分の立場を考えて活発に発言をしていた。

その後、ロールプレイをやってみて、村で調査する際の困難な点について考え、話し合った。

- アイ子たち外国人が3日間という短期間で村の意見をすべて把握するのは難しい。
- たった3日間で、援助してくれるかもしれない人に本音なんて話してくれない。
- 村の代表者の意見が村全体の意見とは限らない。

などの意見が出された。しかし、生徒は援助を「する側」と「される側」の立場や意見の違いに気づき、相手の意見をよく聞くことの大切さを感じたようであった。

【第5時】援助の前に考えること

第5時では、ワークショップ『「援助」する前に考えよう』の「プロジェクトを選ぼう」を行った。

このワークでは、アイ子たちが村での残りの滞在期間を使いバーン村がある地域で活動している地元の3つのNGOを訪問する。それらのNGOはいずれも運営しているプロジェクトに資金の援助を求めている。

まず、もし自分がアイ子たちならどのプロジェクトに支援すべきかの優先順位のランキングをさせてその理由を考えさせた。3つのプロジェクトはそれぞれ「エイズで親を亡くした子供のための養護施設」

「新しい品種を普及させるための実験農園」「村の土地利用図の作成」である。

生徒の半数以上は「エイズで親を亡くした子供のための養護施設」が優先順位 1 位とした。その理由としては「人の命がかかっているものが 1 番大事だと思うから」「今すぐ必要な感じがする」からなどの意見が出された。次に多かったのは「新しい品種を普及させるための実験農園」であった。理由としては「今すぐ効果がないかもしれないけれど、村の将来の自立のことを考えたら一番大切だと思う」「村の安定した収入につながると思うから」などの意見が出された。その一方で最も優先順位が低かったのが「村の土地利用図の作成」であった。その理由としては「他のプロジェクトと比べると今すぐ必要ではない気がする」というものが多かった。そこで、各開発プロジェクトのメリット・デメリットについて意見を出し合った。その中で、住民の意見を聞き入れ、住民とともに開発していく視点を大事にした「村の土地利用図の作成」の大事さが徐々に生徒の意見から出された。

その後、開発プロジェクトにはお金やモノを援助する「慈善型」、モノの作り方や農業の方法などの技術を伝える「技術移転型」、現地の人とともに自分たちの手で問題を解決していこうとすることを支援する「参加型」があることを説明し、3つの開発プロジェクトがどれに相当するかを考えさせた。その際各タイプの歴史的動向に触れ、「慈善型」→「技術移転型」→「参加型」と変遷してきたことや、各プロジェクトはそれぞれに意義ある活動であり、優先順位をつけることで、それらをいかに評価するか、その視点をもつことが大切であると伝えた。

最後に、国際協力を行ううえで、注意すべきこと、してはいけないこと、大切にすべきことを考え話し合った。

- 「援助される側」の立場を考え行動する。
- 相手がどんな援助を求めているかをしっかり聞く。
- むやみやたらに寄付やモノを送ったりするのは良くない。
- 一回のみで長続きしないことはしない。
- 「援助される側」の自立も考えた協力をしなければならない。

など、これまでの授業を踏まえた意見が多く出された。

[授業後の生徒の感想]

- ・国際協力を行うためには、相手のことを考えて活動しなければならないんだなと思いました。ただ行動するだけではダメなんだと思いました。
- ・やはりしっかりと援助する前に調査しないと何が欲しいのか、どんなものが必要なのかわからないと思いました。
- ・どれを優先して進めていくのかは難しいけれど、それだけ簡単に決めちゃいけないことし、相手の意見もちゃんと聞かなきゃいけないなと思いました。

【第6時】募金の向こう側へ（本時）

前時の授業を振り返り、国際協力を行ううえで、大切にしなければならないことを話し合った。生徒の出した意見の中で、

- 本当に「援助される」側にとって必要かどうか（必要性）
- 支援が一回だけで終わらず続けていけるかどうか（継続性）

○「援助される」側の自立を阻害するものにならないか（自立）

の3つが大切であることを確認した。

次に、前時で学習したように開発プロジェクトには「慈善型」「技術移転型」「参加型」の3つのタイプがあることを確認したうえで、第2時で生徒がタンザニアへの支援の方法として考えたものがどのタイプにあたるかを考えさせた。

問題となっていること	支援の方法（第2時的时候）	支援の型
平均寿命が短い	医療技術を教える	「技術移転型」
15歳未満の就学率低い	募金して学校を建てる	「慈善型」
	先生を派遣する	「技術移転型」
H I V感染率が高い	薬を送る	「慈善型」
	予防方法を教える	「技術移転型」
	医者を派遣する	「技術移転型」
5歳未満の死亡率高い	食べ物を送る	「慈善型」
	薬を送る	「慈善型」
清潔な水が得られない	きれいな水を送る	「慈善型」
未舗装の道路が多い	資金の援助	「慈善型」

このように、生徒が第2時で考えた支援の方法の多くが「慈善型」であることがわかった。

次に「慈善型」の問題点を確認し、自分たちが考えた国際協力が「必要性」「自立」「継続性」を大切にしたものになるために再度支援の方法を考えさせた。その際、ワークシートにどのような情報が必要かも考えて書くように促した。

H I V感染率が高い・・・「H I V感染の予防方法を教える」

必要な情報・・・感染が広がる原因、特に感染者の多い場所、予防法を知っている医者数、など。

清潔な水が得られない・・・「井戸の掘り方を教え、一緒に作る」

必要な情報・・・人口の多い所、どこが一番必要か、井戸を掘る材料、水質の良し悪し、など。

15歳未満の就学率が低い・・・「教師を派遣し、タンザニアの教師を育てる」

必要な情報・・・教師の数、教材の不足状況、タンザニアが自立して教えるための教師の指導法、など。

未舗装の道路が多い・・・「タンザニアにあった道路と一緒に作る」

必要な情報・・・本当にその道路が必要なのか、作った道路を継続して使っていけるのか、など。

このように、最初に考えた「慈善型」中心の支援が、「技術移転型」あるいはその先の「参加型」を見据えたものに変容したことがわかる。その要因として、「必要性」「自立」「継続性」を大切にしたものになるために、どのような情報を集めなければならないかという視点を生徒がもてたことがあげられる。「相手の立場にたって支援を考える」ということを改めて考えることによって、第2時よりも一歩進んだ支援の方法を導きだせたのではないだろうか。

最後に、実際に JICA がタンザニアで行っている協力事業の一覧表を配布し自分たちの考えた支援との比較を行った。生徒達は自分たちが考えた支援と似ていることに驚いていた。JICA の協力事業は青年海外協力隊など「人」を通した支援が中心であることを伝え、その理由は、「必要性」「自立」「継続性」を大切にしているからであることを説明した。

まとめとして JICA の松井さんに生徒たちが考えた支援についてコメントをいただいた。JICA の協力事業は「技術移転型」から「参加型」につなげていくこと大切にしていることや、生徒達が考えた支援を行うための調査・情報集めを JICA も大切にしている、実際の仕事の大部分を占めていることを教えていただき、生徒はこれまでの学習と照らし合わせ納得している様子だった。

[授業後の生徒の感想]

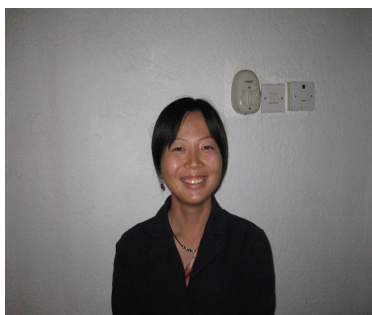
- ・ JICA のプロジェクトが僕の考えていた事と全く同じだったので驚いた。
- ・ 相手の立場に立とうとすることが大事なことなんだと気づきました。自己満足じゃなくて本当に相手にとって良いことなのかを考えることは、国際協力だけでなく普段の生活にも役立つなと思いました。
- ・ 実際に JICA の松井さんに来ていただいて、また一つ学ぶことができました。「技術移転型」で相手に教えることから「参加型」につなげていって何だかいいなと思いました。
- ・ 国際協力というと募金すれば相手の人は喜んでくれると思っていましたが、そうじゃなくて、相手の人がどう思っているかなどそういう気持ちも大切なんだということがわかりました。
- ・ 第2時の時には、特に何も考えずにお金やモノを送ることが国際協力だと思っていました。でも今日改めて考えると、その前に集めなきゃいけない情報や考えなきゃいけないことがあるんだなと思いました。



【第7時】「人」を通した国際協力

私が今回のタンザニア研修で出会った青年海外協力隊員の活動を紹介するとともに、隊員からのビデオレターを視聴した。その際、私が感じた隊員の様子や話していた内容の核となる部分を伝えながら進めていった。

宇野亮一隊員（司書）	メッセージ	島田千尋隊員（環境教育）	メッセージ
	「タンザニアにはタンザニアのやり方がある」 「意見を尊重して一緒に答えをさがす」		「タンザニアの人と同じ目線で、を心掛けて活動しています」 「タンザニアは日本と比べると死が身近な国」

清水由美隊員（作業療法士）	メッセージ	平井里枝隊員（エイズ対策）	メッセージ
	「『幸せって何だろう？』モノがなくても幸せそう」 「みんな一人ひとりが世界の幸せについて考えることが大切」		「子どもや先生達の笑顔がやりがい」 「言葉の違いでうまく伝えられないこともある」

生徒達は、一人の人間としてタンザニアの人々と向き合い共に悩み、話をしながら活動を行っている隊員の言葉に真剣に耳を傾けていた。最後に、国際協力とは一方的に物資や資金を援助することではなく、現地の人と共に悩み考える「人」と「人」とのつながりであることを伝えた。



[授業後の生徒の感想]

- ・いろいろな問題を解決するためには一つの国の中だけでなく、たくさんの国の協力が必要なんだと思いました。人と人は国境を越えてつながっていけると思いました。
- ・「国際協力って何？」って自分でいろいろ想像していたけど、授業を通して「国際協力＝人と人とのつながり」であることがわかりました。募金は今まで何度もしてきたけれど、私達は何に使われているかも知らないまま募金していることを思い知らされました。援助の意味を理解してから募金をするべきだと思いました。
- ・最初は、タンザニアを助けるためには、お金やモノをあげればいいと思っていました。でも、お金やモノをあげてもどうせすぐに無くなってしまいうし、長い目で見たらあまりタンザニアに対して役に立たないことがわかりました。この授業を通して、広い視野を持つことの大切さを学びました。
- ・宇野隊員の「タンザニアにはタンザニアのやり方がある。タンザニアの人の意見も尊重する」という言葉が印象に残りました。これはまさしく今私たちが勉強したこと。青年海外協力隊の人も「継続性」や「自立」や「必要性」を大切にしているのだと思いました。

成果と課題

これまでの私自身の開発教育の実践で違和感を感じていたものがあった。「日本に生まれてよかった」「もっと募金をたくさんしなくちゃいけない」など実践の後の感想にこのような言葉が多く、何か違うと感じていた。日本では、コンビニや学校など日常生活に募金箱が溢れている。本実践を行った学級の生徒達も募金をしたことのない者は皆無であった。募金のそれ自体は何も「悪」ではないし、むしろしないよりしたほうが良い。確かにそうかもしれないが、そこから一步踏み込んで援助の前に考えなければならないことや援助される側つまり「募金の向こう側」を考えるための開発教育を考えてみたかった。

本実践ではタンザニアを通して、「援助の前に考えなければならないこと」「国際協力とは何なのか」を生徒と共に考えることを目的とした。それを発展途上国に行ったことのない中学生にどのようにして伝えるかが鍵であった。そのために、参加型学習の手法を用いたことは生徒の興味関心を高める上で有効であった。「フォトランゲージ」「ロールプレイ」「ランキング」など、様々な学習のスタイルにより、発展途上国の現状をより身近に感じることができたと考える。しかし、内容が伴わなければ方法のみが上滑りをしてしまう。そのことに留意してタンザニアで私が実際に体験したことを踏まえて行った。

また、本実践では、「援助の前に考えなければならないこと」を学習するためにワークショップ『「援助」する前に考えよう』を活用した。本来ならば、このワークの内容であるタイのバーン村ではなくタンザニアを事例としたかったが、資料が足らず断念した。代わりにこのワークをそのまま題材にしたが、タンザニアからは少し離れた途上国の事例を考えることにより、より客観的に生徒は思考できたとも言える。今後の授業者の課題としたい。

現在、国際協力の現場が変化しようとしている。簡単に言えば「モノやお金や技術」を提供することから住民参加型の開発が注目されている。その一方で「途上国にはモノやお金がなく貧困である。したがって豊かな日本はモノやお金を少しでも援助して貧しい人々を助ける必要がある」という「慈善型」を推す授業が未だに日本の教育現場で行われている。私の受けてきた授業も、私自身の授業もかつてはそうであった。しかし、国際協力の現場が変化しているように、国際協力を考える授業も変化してい

なくてはならない。今回のタンザニア研修で様々な人と出会い、青年海外協力隊員が現地の人と共に悩み考える姿を見て改めてそう感じた。生徒の考えたタンザニアへの支援の方法が本実践を通して最終的には一歩進んだものになったように、私自身もこの研修の経験をいかして今後とも「国際協力の在り方」を考えて続けていきたい。

参考文献

- ・『「援助」する前に考えようー参加型開発とP L Aがわかる本』（特活）開発教育協会、2006
- ・『国際協力と開発教育』田中治彦、明石書店、2008